

大学卒業後、オーストラリアで公衆衛生修士号を取得。  
その後、NCGM国立国際医療研究センター病院での経験を経て、国際医療協力局に入職。  
公衆衛生に対して真に貢献したいと願う歯科医師。

## きよはら ひろゆき 清原 宏之

国際医療協力局  
連携協力部 連携推進課  
歯科医師



### ★略 歴

- 2013 大阪大学歯学部卒業
- 2013-14 大阪大学歯学部附属病院 研修医
- 2014-15 大阪大学大学院歯学研究科 予防歯科学教室 研究生  
大阪市内の歯科医院で勤務医
- 2015-16 クイーンズランド大学 Master of International Public Health修了  
(国際ロータリー財団 グローバル補助金奨学生)
- 2017 日本医療政策機構 G-HEP 2017参加
- 2017-20 国立国際医療研究センター病院 歯科・口腔外科レジデント
- 2018 国際医療協力局 国際保健医療協力レジデント研修 修了
- 2020 国際医療協力局 入職

### ★現在の主な担当業務

- ・カンボジアにおける子宮頸がん検診のための病理人材育成と体制整備事業
- ・在日外国人コミュニティにおけるCOVID-19対策支援のための情報ネットワーク強化
- ・保健システムチーム

——— 清原さんが、歯科医師、国際協力を目指したきっかけを教えてください。

私は、はじめから医療職を目指していたわけではなく、歯科医師になろうと思ったきっかけが国際協力でした。高校生の時から「海外に関わる仕事がしたい」と漠然と考えていたのですが、どんな仕事があるのか、どの学部に行けばいいのか、具体的なイメージが持てずにいました。大学受験を間近に控えてもなお進路で悩んでいたある日、モンゴルで医療活動をされている日本人歯科医師の記事をたまたま目にしました。それまで歯科医師という仕事は考えてもいなかったのですが、モンゴルの民族衣装を着た人たちに囲まれて、現地で活動されている先生の写真を見て（これは理屈や理論では説明できないのですが）、「自分はこれを仕事にしたい」と直感的に感じました。入学願書の提出間際、唐突に「歯科医師になって海外に行きたい」と両親に言ったとき、啞然とされたのを今でも覚えています。

## 国際医療協力局に入職する前のキャリアを教えてください。

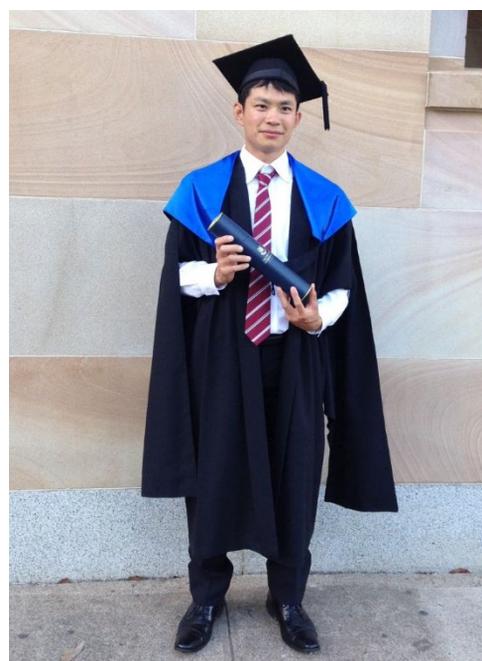
「歯科医師になって海外に行きたい」と思って歯学部を受けたものの、そのようなケースは非常に稀だという（今思うとごく当たり前の）ことを、大学に入学してから気づきました。入学後はなかなか学業に打ち込むことができず、一年留年をしてしまいました。歯学部を辞めようかとすら思ったこともありましたが、歯科医師というバックグラウンドを生かして、海外で活動するにはどうすればよいのか、色々調べてみると「公衆衛生」という分野があることを知りました。「一人だけでなくみんな」「治療だけでなく予防も」といった考え方も共感でき、将来は公衆衛生に貢献できる歯科医師になりたいと思うようになりました。それからは、授業も真面目に？受けて、単位も何とか取得しました。長期休暇には、フィリピンやタイ・ミャンマー国境などで海外ボランティアに参加しました。ボランティアといっても、基本的には現地の方々のお世話になりっぱなしで、こちらが現地に与えるよりも、現地の方々からこちらに与えてもらった量の方が圧倒的に多かったなと思います。ただ、こうした小さな経験を積み重ねていったことで、低中所得国におけるフィールドのイメージが少しずつ具体的になっていき、公衆衛生という観点から国際協力に携わりたいという思いがより具体的になっていったと感じています。



タイ・ミャンマー国境でのボランティア期間中、毎日着用 巻きスカート（ロンジー）

## 国際医療協力局に入職したきっかけ、理由、決め手は何だったのですか。

大学卒業後、研修医を修了してから、公衆衛生を学ぶため国際ロータリー財団から奨学金をいただいて、オーストラリアの大学院に留学しました。留学中は大変なことも多々ありましたが、海外で生活できる自信がつき、クラスメイトにも恵まれ、授業も大変興味深く、私にとってはかけがえのない日々となりました。その一方で、「卒業したら自分はどうするのか」という不安は拭えず、留学後の進路に対する具体的なキャリアパスがイメージできずにいました。国際医療協力局のことを知ったのは、そのようなもよもやを抱えていたときで、たしか「国際」「公衆衛生」「仕事」みたいなキーワードをGoogleに入れて、国際医療協力局のHPを見つけたことがきっかけだったと思います。日本にベースを置きつつも、低中所得国にフィールドを持ち、公衆衛生という観点からこれだけの規模の国際協力を行っている機関は、日本のみならず世界でも類がなく、「将来はここで働きたい」と強く思いました。



オーストラリアの大学院での卒業式  
12月の真夏のガウン（暑い）

帰国後は、NCGMセンター病院の歯科・口腔外科でレジデントとして働きました。上司の先生は優しくも厳しい先生で、3年間という短い期間でしたが、歯科医師としての基礎を叩き直していただきました。その一方で、私が国際協力に興味を持っていることに対しても、多大な理解を示していただき、レジデント期間中はDCC（NCGMセンター病院国際感染症センター）の先生方と、ベトナムのチョーライ病院ICUにおけるVAP（人工呼吸器関連肺炎）※1 予防口腔ケアプロトコル※2 の作成に携わらせていただいたほか、国際医療協力局の「国際保健医療協力レジデント研修」にも参加し、ポリビアとラオスにおけるプロジェクトでインターンをする機会をいただきました。また、協力局が開催する「国際保健基礎講座」にも自主的に参加しました。

こうした中、レジデント3年目の5月に、国際医療協力局が職員を募集すると聞きました。世間的に見れば私はもうそれなりの社会人なのでしょうが、医療の世界ではまだヨチヨチ歩きの雛っこです。私などが国際医療協力局に応募するのは、時期尚早なのではとの不安はありましたが、清水の舞台から飛び降りる気持ちで応募しました。

※1 人工呼吸器を装着している患者に生じる肺炎で、挿管チューブをつたって、口腔内細菌などの様々な細菌が気道の中に入ってくることで起こる。ICUでは頻度が高い合併症だが、口腔ケアを適切を行うことで、VAPの予防効果を高めることができる。

※2 口腔ケアの手順をマニュアル化したもの。VAP予防に必要な項目を整理し、統一したプロトコルを作成した。



3年間、お世話になった歯科・口腔外科での最終日。  
最前列左:清原歯科医師

## ——— 今後の展望、夢を教えてください。

入職した2020年4月に新型コロナウイルスによる緊急事態宣言が出され、海外への渡航はおろか、様々な事業の見通しも立たない中、想像とはかなり違う状況でのスタートを切りました。この原稿を書いている2020年9月現在では、オンラインで国内外の関係者の方々とやり取りをしながら、事業を進めています。

展望というほどではないですが、今後は働きながら博士課程も取得し、フィールドで得られた知見を学術的に発信することで、研究者としても公衆衛生に貢献したいと考えています。また、国際医療協力局は、フランス語圏アフリカとのつながりも強いので、今後のためフランス語の勉強も始めました。

歯科医師としての専門性を今後どう生かしていくのかについては、まだ自分の中で答えは見つかっていません。ただどのような形であるにせよ、「歯や口も良くなった」と言ってもらえるような、自分の専門性が全体と調和しうまく活かされるようなお仕事ができればいいなと思っています。

また、入局してからいただいたアドバイスの中で、公衆衛生に『携わっている』ということと、公衆衛生に『貢献している』ということは、必ずしも同義ではない」という言葉が、私にはとても響きました。公衆衛生という非常に狭いレンズを通してですが、私は今携わっている事業や研究が、当事者の方々、ひいては社会にとって、本当に意味のあるものであってほしいという実直な思いを持ち、日々の仕事に臨んでいます。



入職後、初めて担当した海外研修。コロナ禍におけるカンボジアへのオンライン研修

最後に国際医療協力の世界を目指そうとしている人にメッセージをお願いします。

私は入職して日が浅く、経験も未熟で年齢も若いので、このキャリアパスに載っていいものか少し躊躇していました。ただ、皆さんにお伝えできるのは、私がスマートな人間では決してないということです。大学は留年しましたし、仕事の要領も悪い方で、様々な先生のご指導を受け、今の私があると考えています。そんな非スマートな私ですが、おこがましくも何か伝えられることがあるとすれば、「小さな一歩を積み重ねていく」ということだと思います。

たとえば、「留学」という例をとっても、いきなり留学に向けてまっすぐ突き進むことができたわけではありませんでした。はじめは英語も話せず、留学にはどのような手続きや審査が必要なのか手探り状態でした。しかし、英会話教室に通ってみる、留学を経験した人の講演を聞きに行く、などの小さな一歩を積み重ねていくうちに、だんだんと「留学」という選択肢がより現実的なものに近づいていったように思います。よく目標達成を山登りに例える人がいますが、私もそう思います。一歩を踏み出して、ほんの一段高いところに登ることを続けることで、今まで見えなかった視界が少しずつ開けてくるのかなと個人的には感じます。



ありがとうございました。